殿村遺跡とその時代Ⅴ

— 平成 26 年度発掘報告会・講演会の記録 —

2016
松本市教育委員会

6D2 トレンチ全景（南から）

6A2 トレンチ全景（東から）

土坑の中から見つかった遺物

現地説明会

口絵

目　次

口絵・・3
目次・・4
例言・・4
殿村遺跡第６次発掘調査報告・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・5
殿村遺跡とその時代－中世遺跡の整備・活用－
新潟県胎内市教育委員会生涯学習課　水澤　幸一・・・・・・・・・・・・16

例　言

1　本書は、松本市教育委員会が主催し、平成27年3月21日（土）にピナスホール（松本市役所四賀支所1階）で行った「殿村遺跡とその時代～平成26年度発掘報告会・講演会～」の内容を収録したものである。

2　本文は、松本市教育委員会が録音したものを文章化し、発表者が加筆・修正を加えた。

3　挿図は、当日の配布資料、スライドから再構成し、発表者の指示の下、必要により加除した。

4　本書の編集は、文化財課埋蔵文化財担当が以下の作業分担で行った。
文字起こし：宮島義和、挿図・本文編集（DTP）：伊藤　愛、総括・竹原　学

殿村遺跡第６次発掘調査報告

みなさんこんにちは。殿村遺跡の発掘調査を担当しています埋蔵文化財担当の竹原です。

今回は第６次発掘調査報告ということでお話しますが、その前に殿村遺跡のことについて、少しイントロとしてふれておきたいと思います。いま地図が出ています（図１）。ちょうど下の方に会田小学校があります。そして上にゲートボール場が２棟あって、さらにその上が中学校のグラウンドです。私たちはずっとこのグラウンドを中心に発掘調査をしてきました。ちょうどここに学校ができるということで校舎が建つ範囲を大きく調査をしたのです。そうしましたらこういうかたちで、だいたい15世紀から16世紀にかけて、室町時代から戦国時代に大規模に斜面の土を削って南側に盛り土をしてつくった平場、区画された平らな地面（図２）が出てきたんです。そしてこの前面のところには大小の石を組み合わせて積み上げた石積み（図３）が出てきました。こんな遺跡が出てきたということで、地元をはじめ皆さんの強いご要望をいただいて遺跡が保存されることになりました。

図１

図２

図３

そして平成22年度から、この遺跡はどういう性格なのかを知るために、この一帯で計画をたてて学術的な発掘を進めようということで調査を始めました。すると会田中学校の旧校舎やゲートボール場のあるところからも、溝の跡とか柱の跡あるいは礎石の跡などが出てきまして（図４）、ここも同じようにはるか500年以上前に盛り土をして斜面に平らなひな壇状の地割がつくられていたということが分かったのです。そして昨年度は、最初の年に出てきた平場跡の一番南東の角に近いところを掘りました。こんなかたちで非常に深いところから石積みがＴの字形に出てきました（図５）。この南北に走る石積みというのは、最初の年に見つかった石積みが北側にあるのですが、そこから枝別れをしてまっすぐ南に延びている石積みでした。その先は土塁、土手がずっと築かれていまして（図６）、そこにぶつかるように新旧２つの石積みが南北方向にあるということ、さらにそこから派生して短い石積みが出てきたということで、最初の石積みの向かい側7mのところにある土塁の間の空間は、どうも東側の端は南北方向の石積みでふさがれてなにか池みたいに水がたまっていたということが分かりました。実際ここには粘土が堆積していまして、たくさんの木や木製品が出土しました。

図４

図５

そして昨年度はもう１カ所、小学校の体育館の周りで３カ所ほどトレンチ調査をしました。これは本当に確認程度しかやってないものですからあまり大きな成果はないのですけれども、ちょうど体育館の横、校庭の縁のところではやはり中世の遺構・遺物があるということが分かりました。それともうひとつ、この南校舎の前の芝生

図6

図7

図8

図9

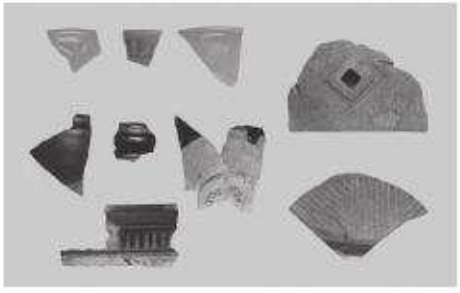

図10

を貼ってあるところを掘ったら、南校舎をつくるときに埋め立てた分厚い土の下から、土間のようにカチカチの地面が出てきました（図7）。ここに石で組んだ溝が出てきて礎石もあります。これは中世のものではなくて江戸の終わりから明治の始め頃、ちょうど体育館のところに「ふだ寺」あるいは「ほだ寺」というお寺があったことをご存じの方もいらっしゃるかと思うのですけど、このお寺が最後には廃寺になって、その後至誠館学校という学校としてしばらく使われるのですけれども、どうもその頃にかけての遺構だろうと思われます。すぐ下は地盤で縄紋土器が出てきましたから、結果として中世の遺構・遺物はここにはなかったんですけれども、ただそのお寺が廃寺になって学校に変わっていく、その時代の石墨とか石版とかあるいは硯とかが出てきたものですから、それはそれで殿村遺跡や補陀寺が後々どうなっていったかということを考える上では非常に興味深い成果が得られたわけです。この学校の部分についてはまた発掘をしたいと思っています。

今までの発掘で出てきた遺物のごく代表的なものですが、ほとんど8割方はこういう素焼きのお皿（図8）とかあるいは土製の鍋（図9）です。それに混じって中国産の青磁とかあるいは中国産の陶器の天目茶碗が出てきたり、あるいは瀬戸産の天目茶碗をはじめとする陶器なども出てきました（図10）。こういう高級なものがともなっているということです。これは断片なのですが今回も展示してあります風炉というもの、それから茶臼ですね。風炉とか茶臼とかあるいは天目茶碗と聞くと、すぐにピンとくると思いますけど、茶道具なんです。ほかにも中国製の茶壺とかがありまして、このように中世のお茶の道具が一揃い出てくるということは松本でもそんなにないんじゃないかと思います。数は少ないのですけれどもこのようなものが出てくることがこの遺跡の特徴となっているのです。

次に今年度の調査ですが、今までずっとグラウンドの辺りや中学校の校舎の周りを発掘したりと、遺跡の南側を中心に調査してきました。そこで今年は遺跡が北の方へどこまで広がるのかを探るためにこのDゾーンと私たちが言っている、廣田寺の前のところですね（図11）、廣田寺の駐車場の南隣の畑をおもに発掘させていただきました。さらに先程見ていただいた最初の石積みがある平場も合わせて調査をしました。今日は北側の方の話をさせていただきます。

北側の部分ですが、別の地図を用意しました（図12）。会田宿からまっすぐ登ってくる道が今は開いています。左に岩井堂沢が、そして右上に廣田寺があります。廣田寺の石仏がある山門の入口があって、橋を渡って西に向かうと会田本町から続いてくる善光寺街道に出ます。そして北東側からくるうつつ沢と岩井堂沢にはさまれた三角形の半島部分のところに会田塚がある、そんな景観です。今回の発掘は廣田寺の駐車場のすぐ下の畑、これを6D1と名づけました。さらにその下の桑が生い茂って道端だけが畑になっている部分、ここを6D2として発掘

しました。

ところでこの場所ですが、実は興味深い事実があります。これは会田本町の大河内さん宅でみつけた江戸時代の絵図ですけれども（図 13）、廣田寺があり、また長安寺も描かれています。上には補陀寺がありますね、「札」という字をあてています。そしてその下に「字殿村」と書かれています。右側の灰色の筋が岩井堂沢とうつつ沢です。２つの沢の間に会田塚があります。そして、廣田寺の参道の前に「字㐂げ」と書いてあるのがご覧になれると思います。さて「㐂げ」とはいったい何でしょうか、非常に興味深い名前です。廣田寺のすぐ前の岩井堂沢との間に「字㐂げ」と記されているわけですから、私たちがまさに今回発掘した 6D を含む一帯が「字㐂げ」と呼ばれていたところなのです。「㐂げ」というのを漢字にあてると、「会」の字に「下」という字を書くようです。「えけ」とか「えげ」というふうに読むんですけど、辞書をひくと禅宗や浄土宗などの修行所と、一言で言えばそういう所だそうです。修行僧が集うお寺ということになるのですが、もしかしたらここには今は廣田寺があるのですけども、もともとはそういうお寺があったのではないかということをうかがわせるのです。

それをさらに裏付ける史料がこれです。「お祓い配り日記」と呼ばれているものです（図 14）。この会田に伝わってきた堀内家文書というのがあるんですが、その中で唯一戦国時代の天正９年（1581）に書かれた文書です。この中には当時の会田に住んでいた岩下氏（会田氏一族）とか、いろいろな名前の人、それからお寺の名前が出てきます。その中にたとえば長安寺とか知見寺といったお寺の名前が書かれています。知見寺は廣田寺の裏山を越えた東側が知見寺沢ですので、その沢にあったと考えられるお寺ですが、長安寺は殿村遺跡のすぐ横にあります。その並びに「㐂け寺」と書かれた寺があります。この「㐂け寺」だけが今までどこにあったのか全くわからなかったんですが、先ほどの絵図の「㐂げ」がもしかしたら「㐂け寺」を示すものではないかという可能性が出てきたわけです。そういうことも念頭に置きながら今回その場所を発掘してみました。これは廣田寺から撮った写真です（図 15）。見下ろすような感じで五常の谷があって会田川がずっと向こうを流れて山を越えて安曇野に抜けていく、高速道路が北側の山の裾を走っています。そして手前が廣田寺の駐車場で、そこから殿村遺跡までずっと斜面が続いているんですが、そのひとつ下の畑、これが 6D1 です 。さらにもうひとつ下の畑、ここが 6D2 になります。桑が生い茂った道沿いのわずかな部分だけだったんですが、ここを発掘させていただきました。

最初に 6D1 ですが（図 16）、上の畑は今日せっかく地主さんがお越しなんですけれども、掘ったらすぐ地盤が出てきてしまいまし

図 11

図 12

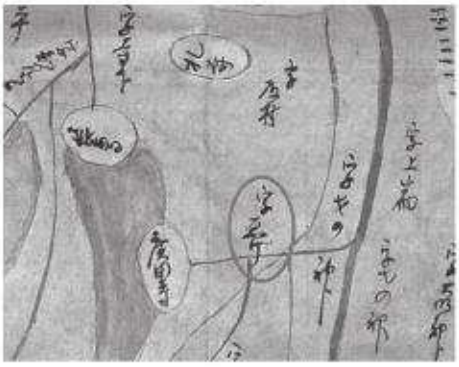
図 13

図 14

図 15

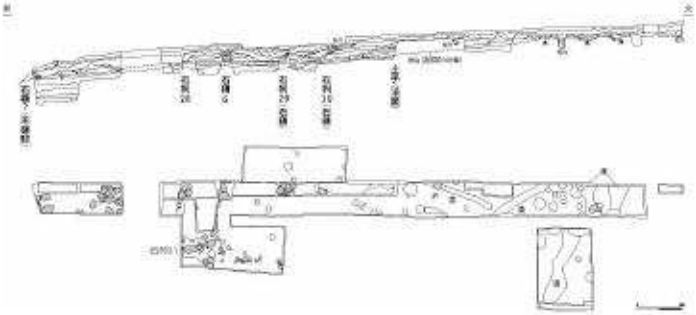

図 18

図 16

図 17

図 19

図 20

図 21

図 22

図 23

図 24

図 25

図 26

た。しかも斜面のまま、つまり岩井堂沢がはるか昔に運び込んできた土砂のままだったんです。ですからここには中世の造成跡はなかったということになるのですが、トレンチの中央辺りで小さい柱穴が 2 つ出てきまして、そのうちの 1 つから内側に耳がついた土鍋が出てきました（図 17）。今日はそれを展示してありますのでまた後ほどご覧いただけたらと思います。明らかに中世の遺構・遺物であります。

次に 6D2 トレンチ、ひとつ下の畑で、これは図面ですけれども（図 18）、ここでは非常に成果がありました。トレンチの状況を写真で示すとこのようになります（図 19・20）。廣田寺があってその駐車場から

数えて３つ目の地割になりますが、この部分から中世に造成された地面が出てまいりまして、そこには石積みがつくられていたり、あるいは柱穴とか溝みたいなものがたくさん出てきたわけです。そして遺物も出てきました。石積みをもう少しアップで見ていただくとこんな感じです（図21）。今まで殿村遺跡で出てきたものと同じような特徴の石積みで、自然の石を加工せずに３段ほど積んだもので、その上を土でとめています。おそらくこの上にはさらに土盛りがされて塀などがあったのではないかと思われますが、こういった遺構が出てきたり、また平場の後ろ側に近いところでは排水を目的としたものでしょうか、溝が掘られていました（図22）。特に北側の方は地下水の通り道になっていまして、雨が降るとものすごく水が湧くものですから、やはり当時から平場をつくった後ろ側で排水対策を重点的にやっていたんじゃないかと思われます。ほかにも真黒く焼けていますが上が削られてしまって残りが悪いのですけど、火を焚いた囲炉裏のような跡が出てきたり、あるいは狭い範囲の発掘ですので並びははっきり捉えられませんでしたが、直径40㎝、深さ50㎝くらいの柱穴がたくさん出てきました。この穴などよく見ていただくとお分かりいただけるんですが、真ん中の部分に柱痕といって立っていた柱の痕跡が残っていたりしていますので（図23）、平場の上に柱を立てた建物があったことが分かってきました。

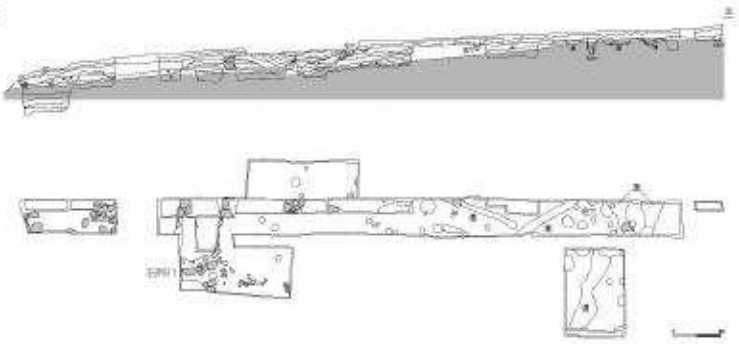

図27

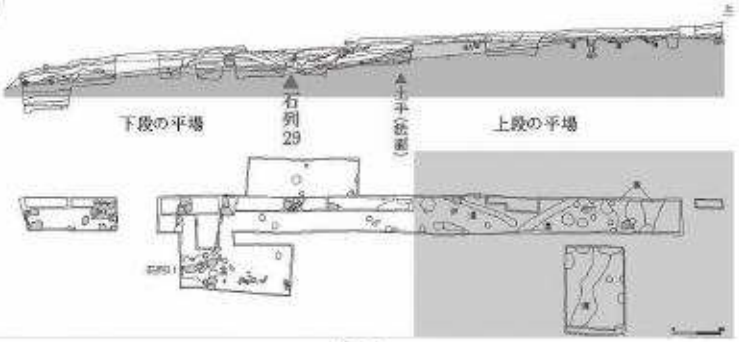

図28

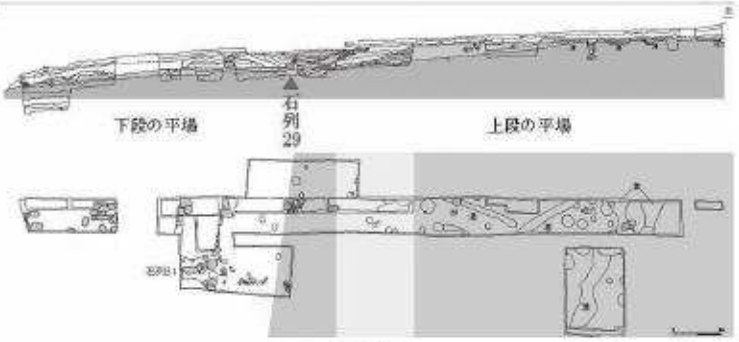

図29

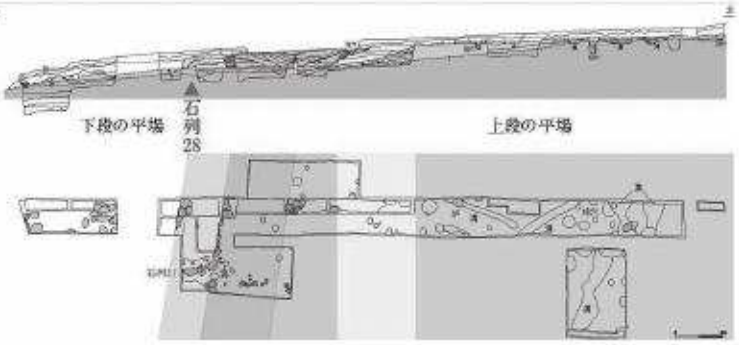

図30

次に出土遺物です。今日は展示してありますので後ほどご覧ください。中学校のグラウンドの調査地点の遺物も含んでいますが、主に地元産の素焼きのお皿ですとか（図24）、土鍋ですとか、あるいはすり鉢とかこね鉢といったものが出ています（図25）。あと中国産の天目茶碗とか瀬戸産の天目茶碗、瀬戸産のいろいろな陶器類ですね（図26）、それからこれは常滑焼、こういった焼物が出てきております。ただし数は非常に少ないです。本当に精一杯展示しても少ししかないんですけれども、遺物を見るとやはり最初に出てきたものと同じように15世紀から16世紀にかけてのものだということが分かります。

それでこの造成跡ですけれども、地下がどうなっているか知るためにトレンチを掘ってみたところ、非常に複雑な盛土の層が姿を現しました（図27）。写真を見ると最初から平らな地面をつくったのではなくて、

どうも途中に石積みがあったり、石積みの上部が崩された石列のようなものがあったり、それを境に地層がはっきり切り替わる場所がいくつか出てきました。それをしっかり観察していったところ、どうも斜面を最初に切り開いて平場をつくった時に１つの平場として造成したのではなくて、上下２段構造の平場からはじまり、それからだんだんと埋め立てが進んで最後は上の段１面だけの大きな１つの平場になったということが分かってきました。それを図に色をつけて示してみますと、最初の段階は上の段と下の段の２段構えで平場があって、その境はスロープのようになっていた（図 28）。それが段階を追うごとに 2、3 mぐらいずつ前へ出てくるんです。そして、段差のところには石が残っていました。多分もともと石積みだったと思われますが、次の段階につくり替えるときにおそらく崩してしまったのだと思います。さらに次の段階には先頭に石積みをつくって後ろを埋めてという方法で拡張がなされていきます。続いて一番残りのいい石積みの段階になりますが、上の段の平場がどんどん広がり下の段がそれにともなって狭まっていく状況が見られます（図 29）。さらに段階を経て、最後はとうとう畑の縁のところまで埋立てが進んで（図 30）、平らな一枚の面になったんじゃないかということが今回わかりました。

このように複雑に拡張が重ねられていること自体非常に興味深いことなのですが、大事なことは最初の年に掘った場所と同じような、四角く整形された平場が広い範囲にいくつもつくられたことがはっきりしてきたことです（図 31）。繰り返しますが、最初の年から掘っているグラウンドの場所はだいたい幅 75m くらいの大きな平場がつくられていて、またあるいは平成 22 年度に確認した東側のゲートボール場が建っている部分にも平場がありました。加えて遺跡の南、平成 25 年度に掘った旧会田小の体育館の横にもどうやらありそうです。そして今回、北側の「字糸げ」と呼ばれていたところであからさまに平場が出てきたということです。まだ断片的な状況ですけれども、実は古い地籍図を見るとそれらの間にも四角い地割が連続している様子がうかがえます。よって広い範囲に今回見つかったような造成遺構が連綿と広がっているのではないかということが想像されるわけです。

そして最初の年に掘った部分の想像図を思い切って描いてみると、一番古い段階はこんなイメージになります（図 32）。こういう平場がどの場所でもすべて 15 世紀から 16 世紀の間に平行して造成されたものだということです。斜面を切り開いて平場をつくる発達した土木技術がその時代にあって、これらの一連の遺構がつくられました。具体的には石積みを構えたり、石積みの後ろの埋め立てを版築という薄く土をたたき締めながら積むような造作が行われています。そして、どの地点も同じ土木技術だということ。それと先程のように拡張が次々と行われるという状況ですけれども、どの場所でも同じように拡張やつくり替えが行われて、平場がだんだん拡大していったということが分かってきたのです。それで平場の上には礎石建物ですとか、柱建ちの掘立柱建物ですとか、柵のようなもの、あるいは空間を分ける区画溝のようなもの、あとは囲炉裏ですね。それから溜め井戸のようなもの、それから前回の報告会のときに辻誠一郎先生が寄生虫の卵がたくさん出てきたと言われた穴がありました。つまりトイレみたいなものが平場の上にはたくさんあったということです。残念ながらこれらがどういう配置でどんな大きさの建物が建っていたのかということがはっきりわかる場所

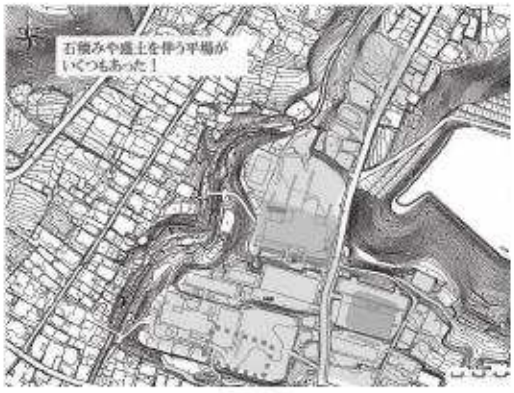

図 31

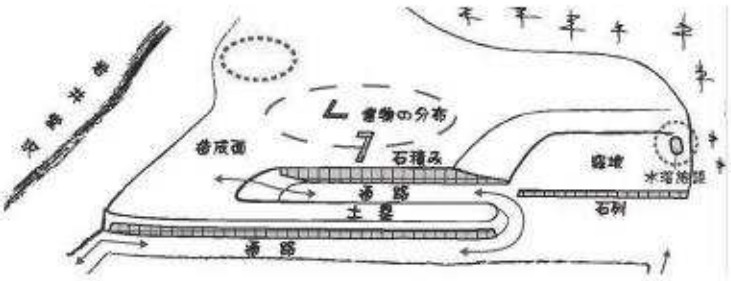

図 32

はなくて、その性格まで踏み込んでいくことがまだできないのが現状です。いずれにしても大規模な造成が行われ、その上にこういった施設が建っていた。それから先程見ていただいた遺物も地元産の皿とか鍋に加えて瀬戸産の陶器が入ってくる、これは地理的な要因があるんですけれどもそこに高級な輸入品とされた陶磁器が入っていた。さらにそういったものの中で特に抹茶をいただくお茶の道具といったものがどこの地点を掘っても必ず出てくる。石積みの前など湿ったところからは、木製の道具やお祭りのときに使われた道具が残されていたことが分かってきました。

殿村の発掘の最初の頃は、会田氏の館跡が出たのではないかと、ここに伝承されている館が出たんじゃないかということで調査をスタートしたんですが、こういう平場が連綿と広い範囲につくられていることや15世紀の段階に石積みの立派なものを構えていること、あるいは遺構や遺物のありかたなど、いろいろな面から検討していくと、有力な武士の館というよりはむしろお寺みたいな宗教施設の可能性の方が高いだろうという見方が有力になってきました。それを踏まえて調査を重ねてきた結果、この広い範囲に同じような平場が連綿とあるという成果が得られたものですから、やはりお寺などの可能性を考えていくうえでひとつの材料になってくると思います。

そこでもう一度先程のお祓い配り日記に出てきたお寺との関係を見てみます（図33）。知見寺は先程お話したように中学校のある尾根を越えて向こう側にあります。次に長安寺ですけれども、残念ながらお堂は朽ちて潰してしまいましたが、現在の長安寺は遺跡の東寄りにあります。お寺の資料をいろいろ調べさせてもらったりお話をうかがった結果、会田氏が鎌倉の建長寺から大覚禅師を呼んで開山した鎌倉時代の終わりごろから始まって、会田氏の全盛の時代にはかなり広い範囲に伽藍があった、しかも私たちがずっと掘ってきたグラウンドの場所にお寺の中心があったということが伝承としてお寺に伝わってきています。ですから長安寺は相当大きなお寺として存在していたということが想像されます。次に小学校の体育館のところには幕末まで補陀寺がありました。こちらは真言宗のお寺ですけれども、岩井堂の観音堂が奥の院という関係になっています。それに加えて先ほど出てきた糸ケ寺がもしこの場所であれば、まさに3つのお寺と遺跡の範囲がかぶってくるわけです。そうするとこれらのお寺と殿村遺跡の関係がとても気になってくる。お寺の古い時代の遺構が発掘して顔を出している可能性も十分考えられるということです。そしてこういう平場がいくつも連続するような中世のお寺というのは、今までこの報告会でも先生方の話に出てきたように、全国にたくさん事例があるわけです。ただ、ここにはもともと会田氏の館があったという伝承がずっと根強くあったので、館とお寺の関係がどうだったのか、実際ここに館もあったのかどうか、それについては大変重要な課題なのですが、まだ残念ながら手がかりがつかめておりません。ただ武士の館と隣接してお寺が築かれるということはよくあることですので、この範囲のどこかに隠れている可能性がありますし、また今まで掘ってきた中に手掛かりがある可能性もあります。

次にもうひとつ気になるところがありまして、過去に2回発掘し報告もさせてもらったんですが、皆さ

図33

図34

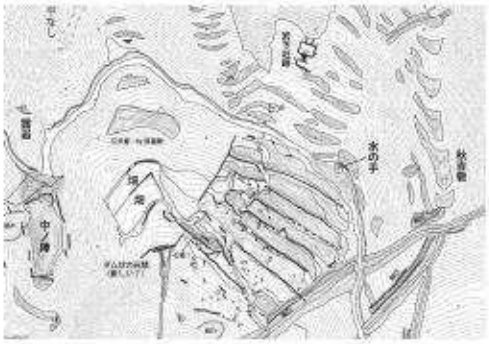

図 35

図 36

図 37

図 38

んご存じの虚空蔵山です（図 34）。これは見るからに信仰の山、虚空蔵菩薩を祭る岩屋神社を抱えている信仰の山で、そのバックグラウンドがあってふもとに先ほどのようなお寺が築かれたと考えられるのですけど、この虚空蔵山の一番頂上の部分が峯ノ城それから中腹のところに秋吉砦や中ノ陣といった城の遺構が築かれているのはご承知のとおりです。おそらく会田氏の築造であろうと伝わっている虚空蔵山城ですが、山城の曲輪というのは尾根の上とかあるいは山の頂上に構えるのが普通です。しかしひとつ変な場所がありまして、このお城の水の手と呼ばれている湧水が出るところ、その部分に 6 段くらい短冊形にひな壇のような平場がつくられています。この谷の中にある平場が非常に気になります。まるでマチュピチュの段々畑というか、石垣で縁取られた畑みたいな感じで平場が 6 段ほどあるのです（図 35）。お城らしい遺構というのは尾根先の部分ですね。秋吉砦と中ノ陣城の間にはさまれた谷間にこういう平場がありまして、この部分を発掘し測量もしてみました。秋吉砦から延びてくる竪堀の西に接してひな壇がつくられて、西側は中ノ陣城にガードされて、平場はすべて石積みをともなっています。その一番上の段のところに湧水のような池があるのですけれども、そこを実際発掘しますとやはり石積みが立派に出てきまして（図 36）、造成された平場の上からは掘立柱の建物跡とか礎石建ちの建物（図 37）が出てきました。そしてなぜか標高 900m を越す山中なんですけれども中国産の青磁や白磁のお碗や皿、また先程見ていただいた素焼きの皿まで含めて殿村遺跡と同じように、生活の痕跡を示すものが出てきたわけです（図 38）。しかもこの礎石建ちの建物は、お城としての最終段階は 16 世紀の終わり、つまり戦国時代の終わりなんですが、それよりひとつ下の 15 世紀の終わりくらいまでさかのぼりそうな古い地面から見つかったのです。要はお城としての営みの初期かあるいはそれ以前の段階から、どうもこの平場では何かしらの活動がなされていたということです。それでこういった遺構のあり方は、やはり殿村遺跡の平場と同じように、通常のお城というよりはどちらかというと山の奥にある中世のお寺にイメージが似ています。そのような可能性をもう少し考えてみたいと思いまして、あと 1、2 回くらい調査をしたいと考えています。そして谷間のひな壇を登りつめると岩下神社の跡があります。この神社自体はどれくらいまでさかのぼるのか分かりませんが、周辺に大きな岩があったり、すぐ背後までガレ沢が延びてきて岩場をバックにひな壇状の平場がつくられていることから、やはり宗教的な景観というものを彷彿させるような構えですので、お城として利用される前にそのお寺のような施設があった可能性が十分考えられると思っています。

さて、これから先はあちこち見聞したものになっていくんですが、同じような遺跡がどこかあるかということで、まずは県内の事例です。上田の塩田にある塩田城です（図 39）。やはり両側に尾根があってはさ

図 39

図 40

図 41

図 42

図 43

図 44

まれた谷間にこういうひな壇がたくさんあって、石垣もありますし礎石建ちの立派な建物も発掘されております。時期もやはり 15 世紀から 16 世紀くらい。これは塩田城と呼ばれているんですけれども肝心な尾根の上には先ほどの虚空蔵山の峯ノ城よりもっと狭い、むしろあまり人工的な手の加わってないような、曲輪（くるわ）と呼んでいいのかもわからないものしかなくて、実は中心部分はふもとの谷間にあるという遺跡です。これも本当にお城といっていいのだろうかという遺跡です。前山寺（ぜんざんじ）という室町時代の未完の三重の塔で有名なお寺が谷の反対側にあるなど、この辺は古い寺院がいっぱい集まっています。

これは飯山の小菅（こすげ）ですね（図 40）。修験の里として有名な小菅で最近発見された、林の中で見つかった平場の遺構です。石垣をともなった平場がたくさん出てきて（図 41）、磐座（いわくら）を思わせるような巨岩がそこかしこにある。私はまだ現地を見ていないのですけれども、小菅の奥の院が上の方にあり、やはり中世寺院を思わせるようなこういった遺構が最近見つかっています。

これは滋賀県の米原市にある有名な北近江の守護京極氏の館跡です（図 42）。京極氏の館として利用される前はどうやらここは寺院だったらしくて中央の一番奥の部分がお堂が建っていた中心域だと思うのですが、そこへ向かう中心参道があります。参道に沿った両側には、殿村遺跡よりもっと立派なものですけど、四角い平場がいくつもつくられています。それを後で京極氏が館にしました。やはり谷に面した縁のところに平場があるということで、そういった景観が殿村にもちょっと通じるものがあるのかなと思います。

これは福井県勝山市の白山平泉寺（はくさんへいせんじ）です。白山信仰の越前側の信仰拠点、ここを拠点にして信仰のための登山道も延びているんですが、ここはものすごいスケールの大きい遺跡でして、この本社と呼ばれているところには巨大な石垣を本殿の跡なんですが、そこを囲むように非常に広い範囲で無数に平場がつくられていて、碁盤の目のように道が張り巡らされています。実際に近寄ってみる

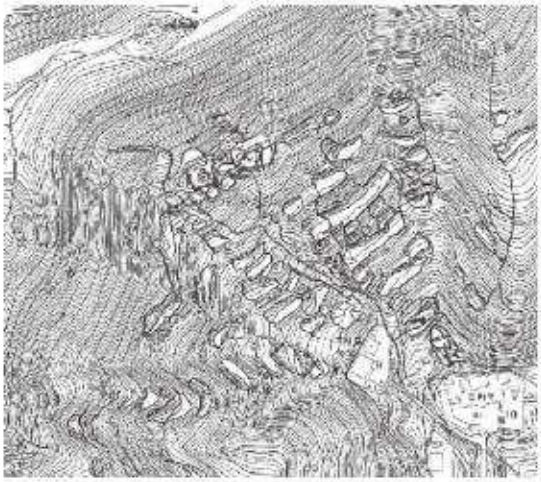

図 45

と石畳の道があったり立派な側溝があって（図 43）、石垣に縁どられた平場がいくつもあるんです（図 44）。おそらく平場の縁には塀がめぐらされ中にお堂などの建物があったと思われます。

これは愛知県の豊橋市にある普門寺旧境内というところです（図 45）。今でもお寺がふもとにあるんですけれども、ここの山の峰には舟形城という山城がありまして大きな磐座もあります。その山の峰から降りている斜面のところに平場がたくさんつくられています。ここの遺跡は虚空蔵山の平場とちょっと雰囲気が似て、地形に沿って細長く平場がつくられている例になります。平場群の一番奥の高いところが中心的な部分になりまして、ここに礎石建ちのお堂の跡と石垣に縁どられた基壇があって、その横にはこの池がつくられています（図 46）。平場の後ろにも磐座を思わせる岩があったり、あるいはさらに後ろには中世のお墓や経塚があったりと、中世のお城と聖地、それからお寺が一体になった姿としています。虚空蔵山などを考えるときには参考になるかなと、そんな遺跡です。

図 46

あとは、前にも中井均先生が講演会で使われましたが、広島県の北広島町にある有名な吉川元春の館の近くに、その息子がつくった吉川氏の菩提寺の万徳院というお寺があるんですけれども、もともとほかの場所にあったのをここにあらためて構えたお寺で、殿村の平場、最初に見つかった石垣の参考にということで、是非見に行くようにと勧められたところです。谷の一番奥のところに平場をつくってその前面に石積みを構える、石積みが前面にだけにしかないというつくりのお寺の跡です（図 47）。

図 47

これは和歌山の根来寺の報告書からクリップしたのですけれど（図 48）、こんなかたちで塀垣の中にお堂みたいのが建っている姿がイメージされるのです。

図 48

最後に、中世の虚空蔵山麓のまとめにいつも使っているイメージ図を見てください（図 49）。虚空蔵山と岩井堂という 2 つの聖地があって、その間を街道が走っている、山麓の一番広い谷である岩井堂沢にはお寺がたくさん集まっていて、街道の交差点のところを中心に今の会田宿の原形になる町があった。それを見下ろす高台の上が殿村で、今まで伝わっている会田氏の館はその一角にあったと伝わる、こういう景観があります。そして会田は伊勢神宮の領地である御厨として会田氏が経営していた。これが今までいだいてきている中世の虚空蔵山麓の景観です。こういった景観を今でも色濃く残したまま、会田の現在の姿があると言っていいかと思います。

発掘の話はこれで終わりにして、ここから先はおまけです。昨年のお盆明けに発掘がスタートしました。6D 地点はまだ桑が生い茂って鬱蒼としていました(図 50)。空もまだ夏空に近い(図 51)。そんな頃でした。だんだんと秋の雲が出るようになってきて（図 52)、やがてコスモスが咲き乱れて（図 53)、気付けばいつ

のまにか山が色づいているんですね。私は見ていないんですが、虚空蔵山の上に見事に虹がかぶさった日がありました（図 54）。そして 11 月ともなると夕方はもう日暮れが早くて、一日の終わりはいつもこんな素晴らしい景色に癒されながら帰途につくという毎日を送っていました（図 55）。今シーズンは柿が豊作だったものですから、葉っぱが落ちても実だけはいつまでも木についているという光景がそこかしこで見られました（図 56）。12 月に入ると朝の冷え込みが非常に厳しくなってきて、朝一番でプレハブハウスに入るとガラス窓はいつも氷の結晶が貼りついていました。氷の結晶越しに殿村のシンボルツリーであるメタセコイアを撮った写真です（図 57）。いつしか常念もすっかり雪山になってしまい、いよいよ今年も発掘は終わりだなという季節です（図 58）。その最後の一週間に雪が降ってしまいまして雪の中葉っぱがすっかり落ちた桑畑の中を、平場がどこまで広がっているか確認するためのトレンチを掘って、これで発掘は終わりました（図 59）。そのときの廣田寺と虚空蔵山、こんな見事な雪山になっていました（図 60）。12 月 6 日は現地説明会がありました。私たちの発掘調査というのは今日お集まりいただいた地元の皆さんのお力添えでできています。この日も雪が降ったにもかかわらず、現場に詰めかけていただきました。そして今日も大勢の皆さんにお集まりいただきました。そのことに感謝を申し上げまして報告を終わりにしたいと思います。ありがとうございました。

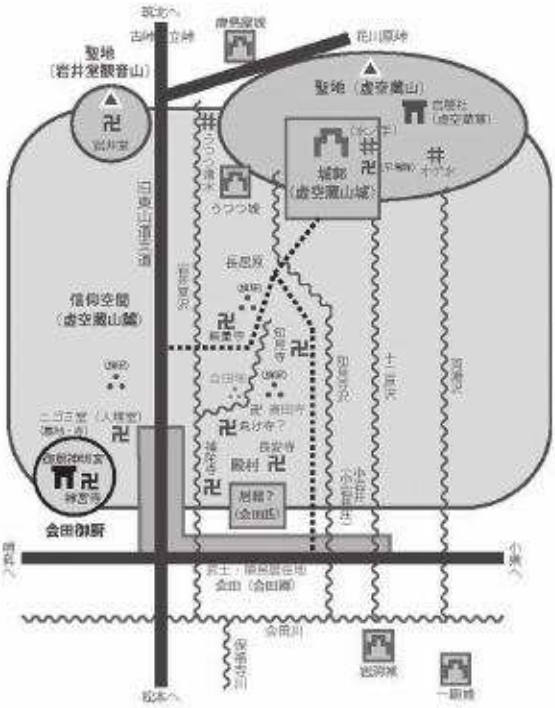

図 49

図 50

図 51

図 52

図 53

図 54

図 55

図 56

図 57

図 58

図 59

図 60

殿村遺跡とその時代―中世遺跡の整備・活用―

新潟県胎内市教育委員会生涯学習課　水澤　幸一

ただいまご紹介いただきました水澤といいます。よろしくお願いいたします。私は今年で役所に入りましてから24年たちましたが、その間ずっと、合併して今は市になりましたが、小さな町の学芸員をやっておりましたので、ずっと史跡整備の担当ですね、発掘をして整備をするというのを繰り返して今に至るということになります。そういう関係もあって、ご縁がありましてこの殿村遺跡を見せていただくことになりまして、毎年四賀の地に来させていただいております。私はほかの先生方のような大きな話はできませんが、最初の前半で各地の中世の遺跡の整備の状況を皆さんにご覧いただいて、写真ですけれども皆さんも一緒に旅に出た感じでご覧いただいて、「あ、これはいいな」というような整備がありましたら松本市教育委員会の方に言っていただいて、整備に活かしていくというようなことで進めていきたいと思います。で、後半には胎内市の整備とその活用の事例ですね、そのようなところをみていただければと思っています。ではスライドに入らせていただきます。

1　全国の中世遺跡の整備・活用

今日リストが皆さんのお手元にあると思いますが、北の方から順番に私が実際見てきた遺跡についてご覧いただきたいと思います。本拠地が新潟なので東日本の事例が多いのですが、西日本も少し入っております。まず北海道・東北からですね。北海道上の国町です。勝山城（図1）は、日本海に臨む丘の上に遺跡がありまして、お宮があるほうが墓地となっておりまして、ここに駐車場があります（図2）。手前の方に中世の居館が広がっておりまして、山の稜を尾根に沿って平場が点々とありまして（図3）、これが建物の跡（図4）、平面の表示ですね、復元整備はされておりませんが、平面形の整備をしております。

これは太平洋岸の函館の志苔館（しのりたて）ですけれども、これも湾に臨む四角い居館がありまして、まわりはお堀で囲まれています（図5）。ここもおとなしい整備ですね、あまり手を加えずに発掘して出てきた建物の中を平面表示して、あとは草刈りをしているわけです（図6）。そのような整備がされております。

浪岡（なみおか）城ですね（図7）。今青森市になりましたが、もともと浪岡町という所で、これは模型ですけれども、

図1

図2

図3

図4

図5

図6

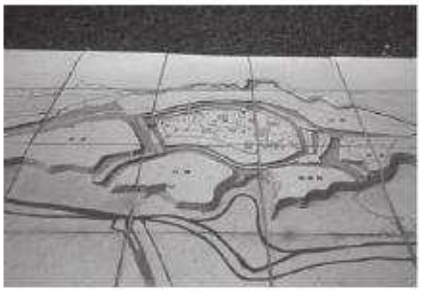

図7

図8

図9

平場が五つくらいですかね。人が住む場所が重なっているような形ですね。こういう連なるかたちの城館が北の端と南の端―南の端というのは鹿児島県ですね―にありまして、北と南の特徴になっています。これは間のお堀を発掘しているところです（図8）。これは整備されているところです（図9）。今の時点でもっと整備が進んでいるところも結構あるんですが、少なくとも私の見た時点というところでご勘弁いただきたいと思います。ここでは柱を少し上にあげて、建物の跡を表現しています。いっぱい掘ったということもあるんですけれども、非常にたくさんの陶磁器が出土します。これは日本海側の中世の特徴でして、日本海側の遺跡には非常にたくさんの陶磁器が入ってきます。少なくとも日本海側は当時の流通の中心であったというのが、こういう出土品から分かります。

これは八戸の根城（ねじょう）という（図10）、八戸ですから太平洋岸のはじっこの方になるわけですが、これが入口で塀に囲まれているわけですね。周りは塀が復元されています。中を全部復元するとこのような感じになるというのが、すぐ隣の八戸市博物館に展示されています（図11）。この城館では、中の建物を復元してありまして、これは東北特有の曲り屋ですね、L字形の建物（図12）。そして馬屋ですね（図13）、そういうようなものが復元されております。ここは珍しいというか、あまりないのですけれど、主殿、一番大きな建物を復元しておりまして、その中に家臣団が居並ぶ様子とか仏事をやる護摩を焚く護摩壇などがあります（図14）。これは作業小屋の風景ですね（図15）。いろいろなものが復元されています。

これは岩手の九戸城ですけれども（図16）、今の青森県の近いところでこういう曲輪が群集している形になる（図17）。最後は豊臣軍によって落城させられたお城でありまして、お堀なんかはすごい深さをもっています（図18）。秀吉の奥州仕置きの時に落ちた場所になります。

これも日本海に臨む秋田の脇本城ですね（図19）。男鹿半島の付け根あたりにありまして、尾根の上に大きな平場がたくさんつくられております（図20）。ここも発掘をしてこれから整備が進んでいくことになると思います。

東北で一番有名な遺跡といえば平泉ですね。これはお寺ですね。無量光院跡になります（図21・22）。これも今発掘が進んでおりまして、池の様子とか建物の様子なんかがこれから明らかになっていくことと思います。で、平泉は町こぞって世界遺産になりましたので、サンクスやセブンイレブンなどのコンビニはおとなしい色調になっています。茶色にして町全体でこの世界遺産を盛り上げようということをやっておりまして、見習うべき点だと思います。で、平泉の柳之御所と呼ばれる館の発掘状況です（図23）。こういう

図10

図11

図12

図 13

図 14

図 15

図 16

図 17

図 18

図 19

図 20

図 21

図 22

図 23

図 24

図 25

図 26

図 27

かわらけという（図24）、この会場にも展示してありましたけれども、トラック何十台分のかわらけがこの堀から出てきたということで、宴会ばかりやっていたということが分かっています。たまにこういう白磁の壺ですね、高級品で割れていないものなども出てきます（図25）。これはたまたま井戸から出てきたので形が残っています。で、お米の種類を変えて田んぼのアートみたいなこともやっておりまして、弁慶をあしらっていると（図26）。先ほどの平泉の柳之御所ですね。いまこのような感じで平面の整備がなされています（図27）。ここは残念ながら、平泉の浄土のテーマに沿わないとして世界遺産からはずされたんですが、平泉の方では追加指定を目指しているということです。

東北でも一番南の会津坂下（ばんげ）の陣が峯城ですね。会津盆地の一番新潟県寄りの所ですけれども、ここにもこんなに大きな土塁がありまして（図28）、この平場の中を発掘しているところです（図29）。ここは12世紀の、やはり平泉と同じ時代の遺跡でして、平泉だけではなく別の勢力も東北の南部にはあったということが分かっております。ここはまだ整備には至っておりません。これも発掘状況ですね、土塁を断ち割ってお堀のところを掘っている状況になります（図30）。ここからもやはり白磁の四耳壺（しじこ）（図31）とか水注（すいちゅう）（図32）ですね、こういうものがたくさん出ておりまして、私は平泉も会津坂下も全部日本海側から入ってきたと思っておりますので、日本海ルートが12世紀くらいから活発に利用されていたというふうに考えております。

次に関東ですね。太田市の金山城というのがありまして、関東平野を一望できる非常に眺望のいい山の上につくられております。この城の特徴は石積みをいっぱい持っているということです（図33）。殿村の整備のありかたの参考にできるのではないかと思っています。ここは池も全部石でおおわれておりまして、日の池（図34）と月の池（図35）、2つの池をもっております。本丸に登っていく道も全部石畳の道になっておりまして、両側は石の壁がおおっています（図36）。関東の戦国時代のお城ですけれども、山自体が石でできておりますので、石材には事欠かなかったでしょうけれども、織田・豊臣という時代よりも前の段階で関東にこういうものが造られているということが分かっております。

これは足利市、足利尊氏の先祖がいたところの菩提寺の樺崎寺です（図37）。ここでは浄土庭園が出ておりましてその写真がないのですけれども、今その池の整備をやっております。殿村が宗教関係の遺跡であればこういう庭園もどこかで出てくる可能性があるのではないかと思います。太田市には同じく先ほどの金山城のほかにも新田荘（にったのしょう）遺跡ですね（図38）、新田義貞が旗揚げしたところです。うちの奥山荘と同じくいろんな地点を1つの名前で指定しておりまして、水源地ですとかお寺の跡でしたり、そういうものをひとつの名称で指定するという方法も今全国で4、5カ所あります。やはり各地域に一番自分たちの誇りとするところはお城が出てきます。

図28

図29

図30

図31

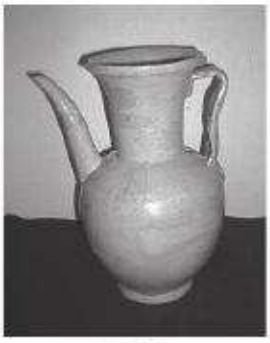
図32

図 33

図 34

図 35

図 36

図 37

図 38

図 39

図 40

図 41

これはつくば市の小田城ですけれども（図 39）、筑波山のふもとにある館で何重も堀に囲まれた遺跡になります。そのへんもずっと発掘を続けておりまして、今だいぶ整備が進んできているということなので、また近いうちに見に行きたいと思っているところです。

つくば市の小田城のすぐ横にある桜川市の真壁城です（図 40）。真壁氏がいたところですけれども、土塁が一部残っているところを発掘して、こんなふうに渡り廊下がついた建物があって（図 41）、これは能舞台と説明会では言っておりましたが、そのようなものも館の中にはあるということが分かってきております。

鎌倉は整備はお寺くらいしかやっていないんですけれども、これは発掘途中ですが、こういう竪穴の建物がありまして（図 42）、ここも湿地なので下に板を敷いて生活面を確保していたと（図 43）。そういうようなところも調査されているわけです。湿地なので水がついているところからも出ますけれども、塀の一部なども出ています。

中世の遺跡で一番たくさん出てくるものは、地域によっても違いますけれども、だいたいかわらけです（図 44）。宴会をしてそのまま捨てる、今でいう紙コップみたいなものです。そういったものがたくさん出るのが中世遺跡の特徴になります。鎌倉はやたらものが出てくるところで、何でもかんでも入ってきまして、鎌倉から一歩外へ出ると全然違う世界が広がっていました。この白磁の四耳壺は、鉄絵を描いた中国からの陶磁器です（図 45）。

図 42

図 43

図 44

図 45

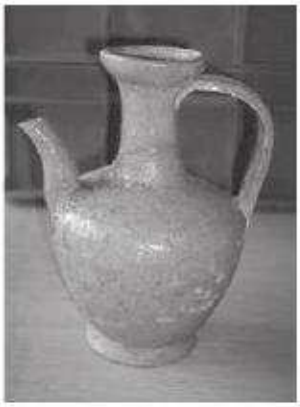
図 46

図 47

図 48

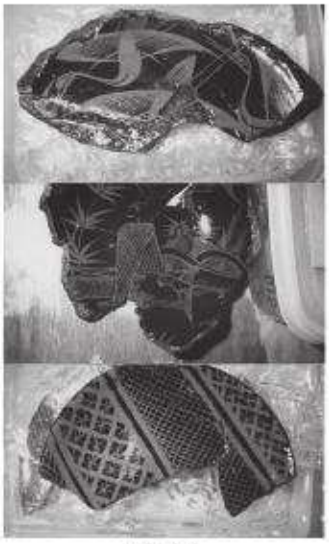
図 49

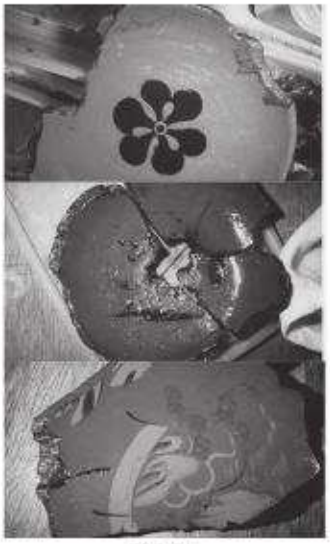
図 50

これは瀬戸ですね（図 46）。やはり京都とか鎌倉からは、普通の遺跡ではあまり見られないものがたくさん出てきます。これなんかは瓦質の鉢ですね（図 47）。殿村でも少し出ておりますが、鎌倉時代のものとは違うのですけれども、こういうのは都市的な遺物ですね。で、鎌倉といえば漆器ですね。湿地帯が多いものですから、当たるところに当たるともう漆器ががばっと出ます。黒いところに赤で紋様を描くものや、いろんな紋様が入ってくるのです（図 48）。これはスタンプを押したものですね（図 49）、それから内側が赤いものです（図 50）。内側が赤いものは鎌倉というより南北朝の頃から出てくるものです。こういった漆器が低湿地の遺跡からは出ることがあります。

山梨の勝沼館です（図 51）。これもお堀に囲まれた内側を発掘しまして、こういうアスファルトで、カラー舗装で建物の規模を示すという整備をしております（図 52）。

飛騨市に入りましたけれども、江馬（えま）氏館跡というのがありまして（図 53）、発掘する前は田んぼというか、石がぽんぽんと見えますがこれが実は庭園の庭石になるわけです。そういうものが発掘前には田の中のあちらこちらに見られる状態であったのが、発掘で元の状態がはっきりしたということになりまして（図 54）、庭園が復元されています（図 55）。

北信越ですね。最初に上越、春日山城です。春日山は発掘をあまりやっていませんが、これがふもとにある一番大きな平場になりまして、御屋敷曲輪と言いますけれども、発掘した結果もう 10㎝くらい下から礎石らしいものがちょこちょこと出ている（図 56）。上杉謙信の居城で有名なんですけれども、謙信・景勝の後に堀秀治とかその後の越後城主が入ってきていますので、その辺の時代との関係性をはっきりさせなければいけないところになります。春日山城で唯一整備化してあるところがこのふもとの、通常登っていくところからかなり離れたところに監物堀というお堀がありまして、これが総構といわれる城下部分にあたります

図 51

図 52

図 53

図 54

図 55

図 56

図 57

図 58

図 59

図 60

図 61

図 62

図 63

図 64

図 65

（図 57）。その内側土塁があり、その上に柵が復元されておりますが、ここに物語館という施設があります。春日山城で山城はほとんど手がついていませんが、ここだけは整備が行われているということになります。なお、麓に市の埋蔵文化財センターがあり、立ち寄ってから山へ登られるとよろしいかと思います。

中野市の高梨館です（図 58）。だいぶ近づいてきたので行かれた方もあるかと思いますが、ちょうど桜が咲いていたころに行ったんですけれども、庭園も枯山水として復元されております（図 59）。周りがお堀で

すね（図 60）。中世の館が復元されています。

で、松代（図 61）。これは長野市がだいぶ長いことをかけて復元をしまして、ここ何年くらいで完成しまして、門なんかが復元されています（図 62）。来年大河ドラマで活用されたりするのかなと思います。

石川県の烏越城という山城なんですけれども、櫓門を復元しておりまして（図 63）、中はやはりちょっと柱を高くして建物の柱跡を表現しています（図 64）。ここは一向一揆が籠った山城として有名なんですけれども、織田が取ったり取られたりということで、その変遷の文献とこの遺構の関係が注目されるところです。

七尾城です（図 65）。七尾城も石垣がいっぱいありまして、七尾城の上から見る七尾湾ですね、非常に眺望がいいところです。能登の守護がいた場所になりまして、石垣はその後の前田とかが入ってきますのでそっちの方の時期だと思いますが、大きなお城です。

そして、中世の遺跡で一番有名なのが福井市にあります一乗谷朝倉氏遺跡です。国の特別史跡となっておりまして、もう 30 年くらい発掘をやっていますかね。調査指導委員の小野先生もこの一乗谷で最初研究を始められまして、それから千葉の博物館の方に移られました。これは模型なんですけれども（図 66）、この川をはさんで町屋部分と領主の館があり、この上と下に大きな石垣で囲まれた入口がありまして、ひとつの戦国の城下町がまるまる残っているというほかにはない遺跡になります。これがその谷の入口をふさぐ土塁です（図 67）。これが朝倉館を正面から見たところ、信長に焼かれてこの上にものすごい火事の跡が残ったもので下が非常によく残っていたということで整備がされております（図 68）。今のところを復元するとこんな模型になるんですね（図 69）。これも京都風のハレの空間と日常生活の空間という場の使い分けがなされています。一乗谷には近くに笏谷石（しゃくだに）という青い凝灰岩が取れるので、そういうものを多用しております（図 70）。また、屋敷の際に全部石垣、石積みがされています（図 71）。庭園も先ほどの館の上の方にいくつか並んでおりまして、これは史跡だけではなくて名勝という指定もかかっております（図 72）。ここは非常に広いので、一日いても時間が足りないくらいいろんなものがあります。町屋部分ですけれども、家臣団の屋敷とか町屋部分の発掘

図 66

図 67

図 68

図 69

図 70

図 71

図 72

図 73

図 74

図 75

図 76

図 77

図 78

図 79

図 80

図 81

図 82

図 83

図 84

図 85

図 86

図 87

調査がこんな状況で（図 73）、職人が油か紺屋さんか分かりませんけれども、こういう甕をいっぱい埋めているところの復元などもされております（図 74）。これがその町屋部分です（図 75）。ストリートをはさんだ両側に武家屋敷と町屋が並んでいるところの写真になります。これは模型ですけれども、これが実際に復元されている町屋部分になります（図 76）。これは裏側から見たところですね（図 77）。だいたい裏側に井戸があってトイレがあって、そして建物があるという基本セットになっています。これは陶磁器屋さんです

かね（図78）、このようなところも町屋の中には復元されております。出土品もやはり戦国大名クラスなので色んな貴重なものが数十万点出土しております。

これは勝山市の白山平泉寺ですね（図79）。先ほど竹原さんの話にもありましたけれども、平たい石で石畳の道をつくって周りを石垣で固めるという僧坊が所せましとあります。三千坊とか言われておりますので、それくらいたくさんのお坊さんがいた屋敷が並んでいました。ぜひこの白山平泉寺と一乗谷とセットでご覧になればこれからの整備にかなり参考になるのではないかと思います。

今度は近畿の方に入っていきます。これは安土城です（図80）。滋賀県にありますけれども、これが発掘で出てきた石段ですね（図81）。江戸時代以後にどんどん改変されたんですけれど、県の発掘によってまっすぐに下から上に上がっていく道路がみつかっておりまして、天守台なども残っています。近くにあります滋賀県立安土考古博物館には関連する展示がされています。これは安土城のふもとの石垣です（図82）。

伊勢の北畠氏館です（図83）。信長が子供を養子に入れたところで、今はそのあたりが神社になっていますけれども、庭園とか館の一部が神社境内として保存されています（図84）。館を復元するとこんな感じですね(図85)。建物がぎっしりとあったというふうに想定されています。

京都の東福寺ですね(図86)。これはただのお寺の写真ですけれども、東福寺は中世の頃からありまして、貿易に関わっていたということが分かっています。これは韓国の南の方で海底からみつかった新安沈船という沈没船から出土した遺物なんですけれども（図87）、これらは東福寺の堂宇を修理・再建するための荷物として積まれていたのが韓国の沖で沈没したことが分かっておりまして、これらから日本と中国、東アジアその地点が海でつながっているということが分かるかと思います。

これはちょっと時代が違うんですが、奈良の平城宮です（図88）。天皇がいた内裏を最近復元しまして、たくさんの人が今訪れていますが、むちゃくちゃでかいですね。こんなのをつくりまして総工費何百億ですかね。とにかく奈良の平城宮に行かれたらぜひ立ち寄っていただけたらと思います。それから朱雀門です（図89）。こういうものも復元されておりまして、これをつくるにあたっては２分の１スケールで実際に組んでみてそれからつくっています。ほかにも先ほどの大きな復元ではなくて、おとなしい復元ですね。上の建物がない土台だけの復元です（図90）。小さな建物の復元とかいろいろな整備がなされております。

図88

図89

図90

図91

図92

奈良の西大寺です。近鉄の西大寺駅の近くにありますのでぜひ奈良に行かれたときには寄っていただければと思います。お寺の場合にはこういう築地塀ですね（図91）。土を積んでつくっていく塀がありまして、大きなお寺でしたらこういうものが伴ってくる可能性があります。奈良は、お茶をたてる時に鉄瓶を置く風炉というものの一大産地でありましたので、そういうものがこちらに来ている可能性があります（図92）。

これは和泉佐野市というところにある日根荘絵図といいまして（図93）、日根荘の荘園のいろいろな地点

をばらばらに、広い範囲全部ではなくてポイントポイントを指定するという形で指定されているところです。こういう神社(図 94)とか長福寺跡とかいろいろな地点が一括して日根荘遺跡として指定されています。こういう別々の地点を 1 つの名前で指定するという方法もありますので、こちらもそのようなことを考え

図 93

図 94

図 95

図 96

図 97

図 98

図 99

図 100

図 101

図 102

図 103

図 104

図 105

図 106

図 107

図 108

られるといいかもしれません。

堺も千利休で有名ですけれども、町衆が力をもっていましたのでいろいろな高級な陶磁器がたくさん入ってきております。史跡としては今の市街地と重なっておりますのでなかなか残せないのですけれども、出土しているものを見れば、大きな都市であったということが分かります。茶の湯の道具もいっぱい出てきます（図 95 ～ 97）。

中国地方です。これも先ほど話がありましたけれども、東広島の吉川元春の館です（図 98）。前面に石垣がありまして（図 99）、中に井戸跡などが復元されております（図 100）。戦国期の終わりごろになりますとこういう石垣がたくさん出てきますが、殿村のような 15 世紀段階の石垣となると非常に少ないということになります。

これも北広島の万徳院ですね（図 101）。先ほどの竹原さんの話にも出てきましたが、こういうストリートがありまして前面に石積みがある（図 102）。で、湯屋ですね（図 103）。当時のお風呂＝サウナが復元されておりますが、これは予約をすると体験できるそうです。池も復元されておりまして（図 104）、ここは私が行ったときはイノシシがたくさん芝生を荒らしておりまして、ぼこぼこに掘り返されていました。こういうような獣害は、深刻です。これは、史跡整備の時に考えなくてはいけないということになります。

これは島根の出雲大社です（図 105）。出雲大社も発掘をやりまして柱穴が出てきたのはご記憶にあるかと思いますが、これが今出雲大社の横にある博物館の入ったところにある大きな柱ですね（図 106）。人の大きさを見ていただけると分かると思いますが、この 3 つを大きな金の輪っかでつなぎ合わせて、そびえたつような柱を立てていたと。今まで嘘だといわれていた非常に高い建物というのが本当だったということが分かったわけです。これは鎌倉時代の話なんですが、もっと前からこういう物が作られていたということが発掘で分かっています。これが復元模型です（図 107）。いろいろな案があります。

安来の富田城です（図 108）。月山富田城。毛利元就が最後まで落とせなかった城です。最終的には滅びるのですけど、ここらへんも石垣があります（図 109）。ふもとの河原から陶磁器が出まして、これもまた日本海側ですね。非常にたくさん陶磁器が出ます。中国産の陶磁器です（図 110）。

浜田市というところでは、これはほとんど 12 世紀、13 世紀でちょっと古い時代ですけれども、国府という昔の役所が石見国の役所であったことから、中国陶磁器が入ってきています（図 111）。もう石見となれば博多から近いのでそこから直接入ってくるということになります。

草戸千軒町は広島の福山市です。ここは瀬戸内の港町です（図 112・113）。

図 109

図 110

図 111

図 112

図 113

大内氏です。山口の大内氏ですけども、発掘しているところで、お寺の中の一画ですね（図 114・115）。すぐ横がお墓になっているので整備していくのも大変だと思うのですけども。凌雲寺ですね（図 116・

117)。こういう石垣で囲まれたお寺も見つかっています。

九州です。律令期に有名な大宰府は、水城（みずき）という平野をずっとつなぐ土塁ですね（図 118)。福岡平野からちょっと奥に入っていったところに土塁を築いて防御を固めていると。で、その大宰府には律令時代以来の役所がずっとあったということになります（図 119)。その一連の大野城の一部でこういう石垣がありまして（図 120)、これは天智天皇の時代につくられたと言われておりますので、時代が 7 世紀という古い時代のものですけど、こういうものが古くからあるということになります。次いで先ほどの大宰府の政庁跡ですね（図 121)。こういう礎石立ちの建物がずっと、これは回廊ですね、中に役所の建物があるということが分かっていますが、だいたいはこういったおとなしい整備ですね（図 122)。どこにどういう建物があったかを表示しているだけの整備になります。太宰府天満宮に行かれた時にぜひこちらの方も寄っていただければと思います。

それから鴻臚（こうろ）館です（図 123・124)。これもちょっと時代が古いんですけれども、福岡のダイエーホークスの球場の下から出てきまして、今球場を確か動かしたんじゃなかったですかね、これを残して。迎賓館

図 114

図 115

図 116

図 117

図 118

図 119

図 120

図 121

図 122

図 123

図 124

図 125

です。外国の、中国とか朝鮮の使節がきたときに接待をする場所ですね。そういうものが福岡にはあります。時代は平安時代くらいが主なところになります。

元寇の防塁です（図 125）。鎌倉時代に 2 回モンゴルから攻め込まれておりますので、1 回目と 2 回目の間にこういう石垣を築いて防御をしているということになります。

博多は言わずと知れた国際貿易港ですので、中国からの陶磁器が腐るほど出ます（図 126・127）。いろ

図 126

図 127

図 128

図 129

図 130

図 131

図 132

図 133

図 134

図 135

図 136

図 137

図 138

図 139

図 140

いろな産地ですね、これはタイですし、タイとかベトナムとか中国・朝鮮だけではなくそのほかの東南アジアからの土器も博多からは非常にたくさん出土しております。

肥前名護屋城です（図 128）。これは秀吉が朝鮮半島に攻め込んだ時に築いた城です。肥前名護屋城は一番メインの秀吉がいた場所ですけれども（図 129）、その周りにも、これは上杉の陣屋と言われているところですが（図 130）、こういう各大名が築いたものが点々としておりまして、これらもいくつかが発掘をして整備をしている状況になります。

図 141

最初に青森のところでいいました鹿児島の知覧城です（図 131）。こういう曲輪がばらばらにありましてその間をお堀が走っている。鹿児島はシラス台地ですので火山灰がいっぱいこのお堀を埋めていると。人と比べてもらいますと 3 m以上お堀が埋まっているというのが分かります（図 132）。

最後は、琉球になります。琉球には、琉球凝灰岩を使ったお城（グスク）がたくさんあります。首里城ですね（図 133）。これは戦争で、沖縄戦で焼けたのでこれも何年か前に全部完成しまして、今行くとこういう修学旅行生がいっぱいいまして、すごく混んでいます（図 134）。まったく石で囲まれた城でありまして、これなんかも発掘を当然しているわけです（図 135）。発掘を通してそれに基づいて上の石垣を復元するということです。ちょっとこういう四角い防空壕の跡ですね（図 136）。別に沖縄だけではないんですけども、沖縄にはたくさんあります。「玉庭」と書いて「たまうどん」と読むらしいんですけれど、これは琉球王朝の歴代のお墓です（図 137）。今帰仁（なきじん）城、とにかく石垣を縦横無尽に使った石垣があちらこちらに見られます（図 138）。糸数城（図 139）、座喜味城跡（図 140）。それから整備という面で見るにはあまり関係ないんですけれども、こういう斎場御嶽（せーふぁうたき）という沖縄の信仰に関わる遺跡です（図 141）。巨岩のところにそういう儀式を行った場所がありまして、沖縄を考える上で重要な遺跡があります。沖縄は当時中国と直接

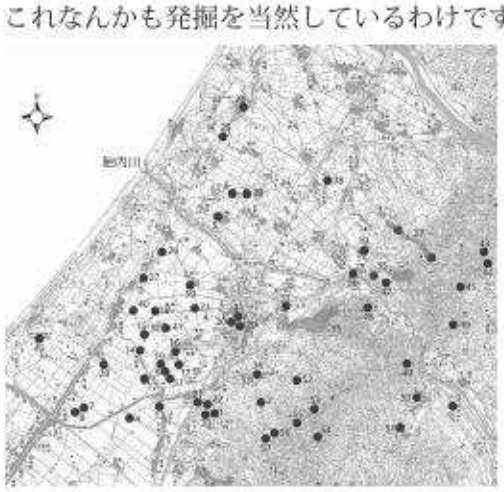
図 142

図 143

図 144

図 145

図 146

図 147

図 148

交易をしておりましたので、中国の陶磁器が非常にたくさん出ます。中国から直に来ますのでいろいろなものがあります。

ここまでで前半の部分、各地の遺跡を見ていただきました。聞いてもわからない、見ないとわからない部分がありますので、今の中で「これは」というものがあればぜひ現地をご覧になっていただければと思います。

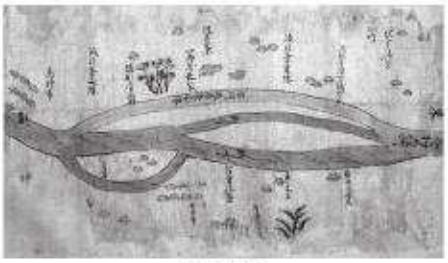

図 149

2　奥山荘城館遺跡の整備と活用

これからようやく私のおります胎内市、奥山荘城館遺跡の整備と活用の状況を聞いていただきたいと思います。胎内市というのは中条町と黒川村がくっつきまして、真ん中を流れるのが胎内川になります。そこから胎内市という名前になりました（図 142）。これが日本海です。日本海の海岸線が 20km くらいあります。点の落ちているところが中世の集落であるということになります。奥山荘城館遺跡というのは 12 地点ありまして、あちこちが指定されております。12 地点の内一カ所だけが隣の新発田市に入っておりまして、胎内市としてはほかの 11 地点を順番に発掘をして整備をしていくというのが私の仕事になっています。海岸に面した奥山でないところをなんで奥山というのかといいますと、この奥に見えます山全体が奥山と呼ばれておりまして（図 143）、おそらくこのあたりから開発が始まりまして平場のほうに出てきたということが考えられております。

図 150

図 151

まず 1 つめです。古舘館跡（図 144）。ここもお寺が入っておりましてこの境内地は手がつけられないんですけど、周りの土塁がよく残っておりまして、空いているところを発掘させてもらった結果こういうお堀の跡が出てきました(図 145)。方形屋敷などが出てきまして、これ実は土塁が折れ曲がっていくんです。こういう形は江戸時代のものではないかと言われていたんですが、発掘の結果江戸時代のものは全然出なかったので、15 世紀の中世の後半の遺跡だということが確定しまして国の指定に追加してもらったという経緯があります。

図 152

鳥坂（とっさか）城という山城ですね（図 146）。ふもとに館が 3 つあります。奥山荘には、領主が 3 人いまして、私がもといた中条町は中条氏です。その中条氏から中条町という名前ができたんですが、まずその殿様が戦国時代に使った山城と館になります（図 147・148）。これは現在土地の買収を進めているところでして、発掘調査にも入ったばかりで、これから整備を行っていく場所になります。このあたりに館があって、この段丘の際にも館があるということが分かっています。

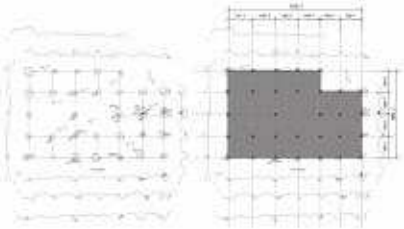

図 153

それから整備が終わった 2 つの史跡です。坊城館と江上館、2 つの館の整備が終わりまして、今公開しておりますが、最初 11 年かかってこの江上館を発掘して整備をしました。その後この周りに団地がつくられる計画があって発掘していたところ、ここで室町時代の江上館に先行する鎌倉時代の地頭の屋敷が出てきたということで、急きょ文

図 154

図 155

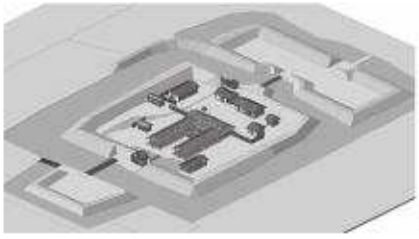

図 156

図 157

図 158

図 159

図 160

化庁と協議しまして残すことになりました。これは開発をやめて保存したという事例です。殿村遺跡も学校をつくるのをやめて残したという非常に珍しい事例ですので、同じような状況になります。それで、これが胎内市が持っている国の重要文化財になっています 700 年くらい前の中世の絵図「波月条絵図」（図 149）でして、ここが胎内川です。胎内川の両側に地頭の屋敷が 2 つあります。この地頭の屋敷が描かれている実物が坊城館から出たということで保存になったということです（図 150）。復元するとこのような感じですね（図 151）。西側部分は途中で保存が決まったので、発掘を最後までやっていないのでよく分からないんですが、広場があって、馬場ですね、馬を走らせる場所がありまして、この東側寄りの方に建物がたくさん建っているという状況です。こんな状況で整備をやっておりまして、実は今年の春から公園としてオープンしています（図 152）。これは建物跡が見つかったものをこういうふうに整備するという図面です（図 153）。先程見ました絵図の上にこういう 2 棟の―この四郎茂長家というのが地頭です―この地頭の屋敷が描かれているもの（図 154）と同じような建物がこの坊城館から出まして、鎌倉後期の地頭がこの場所にいたということが分かってきました。

そして室町時代に方形居館という四角い土塁に囲まれた空間に引っ越すわけです（図 155）。先程見てもらいましたように、鎌倉時代にはこういうまわりを囲む土手は見つかっていません。室町時代になってこういう土手を回すということが分かっております。これも復元しますとこんな感じです（図 156）。北と南は両方堀がめぐっているので馬出用の曲輪がありまして、真ん中に領主の空間があると。周りは平場なので水堀に囲まれているということがわかっています。これが発掘している状況です（図 157）。土手は 3m の高さが残っておりまして、これはお堀を掘った時の状況です（図 158）。この後に見えますのが橋脚でして、橋のかかっていた地点が見つかっています。整備はこれを元に復元したわけです。隣に歴史館というガイダンスの施設をつくりまして（図 159）、その一面の壁には先ほどの土塁をはぎ取ってきたものを展示しておりまして、実際の土手の大きさを体感していただこうということになっております（図 160）。そして先程発掘した橋脚のあった場所に橋を架けまして（図 161）、櫓門もつくりました（図 162）。これはつくってすぐの写真なので、それから 10 数年たっておりますので現在はだいぶ味が出てきております。実際の櫓門の上には当然屋根がついていると想定されるのですけれども、これは文化庁が根拠のないものはつくってはいかんということで、2 階部分はつくってないわけです。あくまでも想像ではなくて発掘調査の成果に則って復元するというのが史跡整備の基本になります。門をくぐるとこんな感じですね（図 163）。白い砂利はハレの儀式をやる空間となっております。塀でしきられた向こう側が日常生活の場ということになります。これを CG にするとこんな感

図 161

図 162

図 163

図 164

図 165

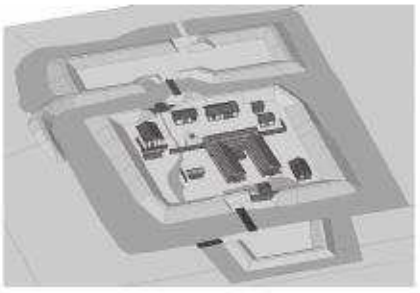

図 166

図 167

図 168

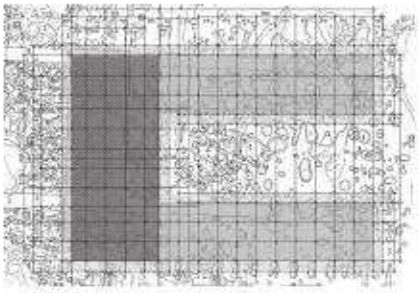

図 169

図 170

図 171

じで、入ったら正面に儀式用の建物が建っていると（図 164）。これを建てるとなると数億円というお金がかかりますし、根拠のないことはあまりできないので、こういう大きな建物などは復元できないということになります。しかし根城なんかは、大きな建物を復元しておりますので、それは文化庁が納得してくれればできるということになります。これは、発掘状況ですね（図 165）。3 年分の発掘したものをつなぎ合わせた図面です。実はちょっと掘りすぎていまして、後で文句を言われたんですが、掘らないとわからないので掘りました。今は多分こういう掘り方はだめだといわれると思います。そしてこの柱穴から復元して、ぜんぶで 60 棟の建物が出ております。その内一番最盛期の 15 世紀後半の建物配置は、このような感じになると考えています（図 166）。これは発掘しているときの写真です（図 167）。作業員さんがずっと並んでいますが、これが柱のあった場所です。こっちも大きな柱が続いていきます。これが儀式用の建物になりまして、一番真ん中にこういう建物があるということになります（図 168）。これがその設計図です（図 169）。柱を拾った図面になります。今はこういう状態で整備をしておりまして、ハレの空間は白い砂利のところにカラーアスファルトで、塀をへだてた日常生活の場は芝張りで色も普通の色のアスファルト舗装です（図

図 172

図 173

図 174

170)。蔵を 1 棟復元していますが、掃除用具などの道具が入っていまして実際蔵として活用しております。ここにはずっと水溜めがありまして、実際水をはると使い勝手が悪いので青い砂利を敷いて水を表現すると。お堀につきましても正面の復元したところ以外はこの青い砂利で水を表現するという手法で整備をしております（図 171)。これは先ほどの蔵（図 172）と今休憩所として使っておりますけれども（図 173)、これはイベントの時に非常に重宝します。音響機械とかをこの屋根の下に入れてイベントをやるわけですけれども、この戸は冬場は締めて戸をはめるという形でつくっております。この建物はあまり大きくないんですけれども、これ 1 棟を復元するだけで 2 千万円かかりましたので、普通の家が 1 軒建つくらいのお金ですね。なんでそんなにお金がかかるかというと、昔の技法でつくっております。表面をチョウナという今は使わない昔の道具でつくったり、屋根も板を割ったり、そういう人の手間が非常にかりますので当時の建物を復元するのには非常にお金がかかると。それは松本市さんも松本城などでお分かりになると思います。この館からは、非常に立派な青白磁の梅瓶（めいびん）という壺が出土しました（図 174)。これは、発掘でばらばらで出てきたものを復元したものです。かなりパーツがそろっておりまして、上から下までつながっております。それから茶壺といった高級品が出土しています（図 175)。トイレは野外にこのようなシックな感じで景観に配慮したものをつくっております（図 176)。それから青磁、これも中国からもってきたものですね（図 177)、青磁（図 178）とか白磁（図 179）とか舶載天目茶碗（図 180）です。なぜか越後は全国で琉球に次いで中国の天目茶碗がたくさん出ているところになります。日本海にそういうものがたくさん入ってくるということが出土品から分かります。

これまでが奥山荘の史跡整備の話でして、これから活用部分を少しお話します。最近年々大規模になってきまして、奥山荘の歴史を先ほどの館を使って板額（はんがく）という、ちょっと時代は違うんですけれども中条ゆかり

図 175

図 176

図 177

図 178

図 179

図 180

の姫君のイベントをやっております。最後は、長野のお隣の山梨県の甲斐の国へお嫁に行くのですけれども、鎌倉幕府と戦うという勇猛なお嬢さんが奥山荘におりまして、それを継承して史跡でイベントを毎年９月にやっています。ポスターもだんだん立派になってきました（図 181）。このお姫様が戦ったのが 1201 年、約 800 年前、鎌倉時代の初期のことになりまして、その関係でこの鎧をつくりまして（図 182）、最近では馬も出てきまして（図 183）、かなり本格的なものになっています。ただしこの鎧は、段ボールでつくっています。非常に軽くて暖かくていいんですけど、汗をかくと破れてくるというのが難点ですね。

こういう女性を顕彰しまして、まず町の中央の通りから武者行列で史跡まで行列をするというところから始まります（図 184）。そして子供たちも段ボールの鎧を着て参加をするのですけれども、胸のシールなんかを子供たちにつくってもらって参加してもらうというようなかたちです（図 185）。

会場の外には出店もできまして、ここ数年は 2000 人を超えるお客さんに来てもらえるようになっています（図 186）。宴の始まりは、一応中秋の名月ということで夜にかけてやるイベントになります。太鼓の演奏ですね（図 187）。で、先ほどの復元したアスファルトの舗装をしてあるところにお客さんに座っていただいて、こういうステージをつくると（図 188）。仮設なので史跡の地内でも全く問題はありませんので、ここをメインの通路として活用します。先ほど言いましたあの建物ですけれども、そこに音響の方が入ったり、着替える場所にしたり、そのように建物を使っています（図 189）。山梨にもらわれていったお姫様が里帰りしたという設定です。この門から入ってきます（図 190）。で、先ほどのように太鼓（図 191）とか獅子舞（図 192）、よさこいなんかをやってもらったり、史実に基づく演劇も毎年やっています。また板額御前コンテストも２年に１回やっておりまして（図 193）、ここで選ばれた人たちに２年間いろいろなイベントがありますので、そういうところで活躍していただくということでやっています。これは今日使わせていただいた写真ですけれども、いろんな配役がありまして、実際矢は飛ばさないんですけれども弓を使って、館の中で演劇をやってもらっています（図 194）。これをやっている団体は板額会という一般の団体ですね、そこに生涯学習課が協力してテントとかを使ってやっているわけです。そういうやり方でずっとやっておりまして、年々たくさんの人が来てくれるようになりました。史跡を使っていただければそれが一番いいと思いますので、そのようにしています。

このように私が実際に行ってきた遺跡を見ていただいたり、それから活用のしかたですね、これはいくらでもあると思いますからその一例を今回みなさんにご紹介させていただきました。今後殿村遺跡をどのように整備して活用していくかということは、皆さん地元の方次第だと思いますので、何らかの参考になればと思います。それではこれで終わりにさせていただきます。ご静聴ありがとうございました。

図 181

図 182

図 183

図 184

図 185

図 186

図 187

図 188

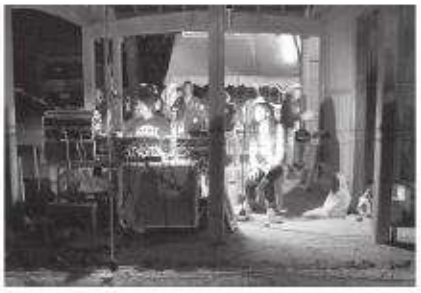

図 189

図 190

図 191

図 192

図 193

図 194

講師プロフィール

水澤　幸一（みずさわ　こういち）氏　　新潟県胎内市教育委員会生涯学習課文化財係長

1967 年、滋賀県に生まれる。1991 年立正大学大学院文学研究科修了。以後、中条町教育委員会勤務、合併を経て胎内市教育委員会史跡奥山荘城館遺跡の整備にあたる。2008 年に新潟大学より博士（文学）授与。2016 年現在、現職。

専門は歴史考古学。土器・陶磁器、城館、石造物等から、中世社会の解明に取り組む。

著書に『奥山荘城館遺跡』（同成社 2006 年）、『日本海流通の考古学』（高志書院 2009 年）、『仏教考古学と地域史研究』（高志書院 2011 年）などがある。

殿村遺跡発掘調査と報告会・講演会の記録

＜平成 20・21 年度＞

殿村遺跡第 1 次発掘調査（学校建設のための事前発掘調査）

＜平成 22 年度＞

殿村遺跡第 2 次発掘調査（殿村遺跡調査事業に係る発掘調査の開始）

殿村遺跡とその時代Ⅰ

平成 23 年 3 月 19 日開催

講演「殿村遺跡とその時代―中世の山寺・山城・居館―」

講師　中井　均　氏

＜平成 23 年度＞

殿村遺跡第 3 次発掘調査

＜平成 24 年度＞

殿村遺跡第 4 次発掘調査・虚空蔵山城跡第 2 次発掘調査

殿村遺跡とその時代Ⅱ

平成 24 年 4 月 14 日開催

講演 「殿村遺跡とその時代―中世の整地と人々のくらし―」

講師　中澤克昭　氏

殿村遺跡とその時代Ⅲ

平成 25 年 3 月 16 日開催

講演 「殿村遺跡とその時代―虚空蔵山城と中ノ陣城から見た戦国時代―」

講師　笹本正治　氏

＜平成 25 年度＞

殿村遺跡第 5 次発掘調査・虚空蔵山城跡第 3 次発掘調査

殿村遺跡とその時代Ⅳ

平成 25 年 10 月 12 日開催

講演　殿村遺跡とその時代―環境史から見た中世の景観―

講師　辻　誠一郎　氏

殿村遺跡とその時代Ⅴ

―平成 26 年度発掘報告会・講演会の記録―

発行日　平成 28 年 3 月 31 日
発行者　松本市教育委員会
〒 390-8620
長野県松本市丸の内 3 番 7 号
印　刷　精美堂印刷株式会社